法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-16

<論説>地誌の終焉

NAITO, Masanori / 内藤, 正典

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
22
(開始ページ / Start Page)
32
(終了ページ / End Page)
43
(発行年 / Year)
1994-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00026137

〔法　政　地　理
J. Geogr. Soc. Hosei Univ.
22. p 32—43. (1994. 3)〕

地誌の終焉

内　藤　正　典

Ⅰ　地誌とは何であったか
Ⅱ　科学主義の不幸
Ⅲ　制度化の不幸
Ⅳ　地域研究と地誌のあいだ
Ⅴ　アクチュアリティへの射程

Ⅰ　地誌とは何であったか

地誌あるいは地誌学とは何であったか。地理学の本質をめぐる議論のなかで，地誌学は系統地理学と二項対立的に対置される。論理実証主義を明瞭に志向する計量地理学が登場してから，日本でも，地理学は科学たるべきだという言説が蔓延した。この主張もまた，地理学のなかで支配的な方向となるには至らなかったが，シェーファーの「例外主義」批判によって，前近代的な，科学たりえぬ叙述の集積という批判を浴びせられた地誌が，地理学の本質というかつての地位を喪失したことは間違いない。

にもかかわらず，日本の大学には，地誌あるいは地誌学が存在している。そこでは，地誌学，日本地誌，ヨーロッパ地誌といった科目が開講される。地誌学では地誌とは何かが講じられているのだろうし，個別的な地誌では，特定の地域についての何らかの叙述がなされているはずである。

「例外主義」批判以降，地誌学と地誌を改革する試みは，ほとんどなされなかった。周知のように計量革命そのものは，その後，論理実証主義への批判が登場することによって，トーン・ダウンしてしまうのだが，地誌はこの種の批判の結果として，積極的に生存の理由を認められたわけでもない。人文主義的地理学の登場は，計量革命によって論難された伝統的地理学の担い手たちを安堵させたかもしれないが，地誌復興の知的インセンティブにはならなかった。

法則定立の主張と計量地理学が現れて以来，いわゆる系統的な地理学の方向をめぐっては，さまざまな異議の表明があり，新たな展開が見られたが，地誌に対しては「例外主義」批判の後，地誌の方法を改革することを射程に入れた論争が提起されることはほとんどなかった。その結果，地誌のありようをめぐる議論の場——すなわち地誌学——は，瀕死の状態に陥り，地誌はわずかに書き手の地域に対する感性を表現する機会となって残ったのである。

地誌とは，大方の地理学者の理解によれば，何らかの方法をもって特定の地域を記述することを意味している。だが，何をいかに記述するかについては，特定の地域を多面的に研究し，総合的に記述する仕事というレベルの枠組みが示されてきたにすぎない[1]。計量革命の登場以前に，地誌学を地理学の本質と位置づけようとした人びとは，個々の地誌的研究を地表全体の比較考察へと統合させ，最終的には個々の地域の特性を類型化する方向へ進むことによって，科学の名に値するものになると考えていた。ヘットナーの時代には，このような方向を示すことが，地理学の統一性を語ることと考えられたであろうし，計量革命をへた後の時代でもなお，それは「例外主義」批判に対するプリミティブな弁明として使われることがあった。

日本の地方自治体には，町誌，村誌とよばれる書物がある。このような書物は，その地域の歴史や自然そして産業や集落のありようなどを綿密かつ網羅的に記述していて，いわばその町や村の百科全書である。地域の百科全書としての地誌の歴史は古い。明治以前の各国風土記の類に，すでにその淵源をみることができるし，明治に入ってからは，軍事行動に必要な兵站上の情報を提供する目的で，地誌（兵要地誌）の編纂が行われた。皇

国地誌を始めとする明治以降の官撰地誌は，同時に，近代国家としての体裁を整えなければならなかった日本が，アプリオリに統一体の体をなしていることを知らしめるという国家イデオロギーの産物でもあった。当初，地誌の編纂にあたっていたのが，内務省であったことが，それを物語っている。

石田龍次郎が言うように，このような官撰地誌は，中国古来の地誌と同様に，新しい統治形態が成立したことを契機に，統治の領域に関する知識を集大成しようとするために編纂されたものであって，その意味で記述の目的は明らかであった[2)]。

石田は，このような官撰地誌が学問としての地理学とは別個の存在だとして，官撰地誌に対置しうる地理学の推移をたどっている[3)]。しかし，石田が対置しようとしたのは，権力による統治の思想を呈した地誌でないもの，という意味の地理学であって，官撰地誌に代わる地誌ではなかった。石田自身は地理学が社会科学として成立すべきであると考えていたようだが[4)]，明治以降のアカデミズムに制度化された地理学は，多かれ少なかれ自然科学的な出自をもっており，社会科学としての定着を阻害する萌芽をもっていた。

その後，社会科学をうたう経済地理学が生まれた後も，その大勢は，日本の個々の地域で，経済学的な手法を用いて産業の立地や産地の形成を解明するというところにあって，地理学が社会の現状といかに切り結ぶかという意味での社会科学的な仕事はきわめて限定されていた。むしろ経済地理学は，石田が対決しようとしていた理科的な地理学に似て，地域の構造――それも多くの場合は産業の構造――にひそむ原理なり法則なりを見いだそうとするか，逆にほとんど借り物といってよい経済学の法則をある地域で検証するという方向に向かっていったのである[5)]。その結果，地域は研究者が見ようとしているもの，すなわち下部構造が展開する場として位置づけられることになり，地域の構造とよぶには，あまりに皮相な理解にとどまることになった。

ところで，1953年にシェーファーが「例外主義」の批判を展開するまで，地理学の有力な分野は地誌学が占めており，それは膨大なモノグラフの集積であったと言われる。地域の個性記述をいくら集積したところで，学問としての統合はできないことを指摘した「例外主義」批判を契機として，地理学は個性記述の学から法則定立を目的とする「科学」に革命的に転換したことになっている。そして，法則定立に際して多くの計量的手法が不可欠であったところから，これが後に計量地理学の発達をうながし，計量革命の名で呼ばれるようになった。

現代の地理学の方向を転換すると宣言したこの革命によって，地誌を地理学の本質と公言する人びとは減少した。だが，計量地理学と地誌は，革命の理念によれば共存しうるはずもないのだが，あたかも古来の地理学のテーゼ――系統地理学と地誌とが地理学という車の両輪をなす――を体現しているかのように併存し続けたのである。

計量革命を支持する人びとによって罵詈雑言を浴びせられてもなお，地誌が存在し続けた原因はどこにあるのだろうか。このことにはいくつかの解釈が成り立つだろう。その一つは，計量派が批判したところで，伝統派をインスティテューションから放逐することはできなかったということである。実際，大学というところは，学問的に無価値だと論難することで相手を放逐することはできない。

第二に，理系の学部において地理学を学んだ研究者にとっては，地域に隠されているある種の空間的秩序を探究する程度のことであれば，従来からの理科的素養にもとづく地理学でも対応できたことがあげられる。

さらには，――おそらくこれが最も大きな原因ではないかと推測しているのだが――社会科教員を養成する学科，あるいはその可能性を保証している学部では，高等学校までの地理教育での要請がある以上，教職科目との関係で地誌を廃止できなかったことを指摘する必要がある。日本の地理学界は，社会科ないし地理科の教員養成という使命のうえに成り立ってきた。少なくとも，教員養

成系の地理学科や教職科目の大学教師のポストが，地理専攻の研究者たちの就職の場として提供されてきたことは否定できない。アカデミズムの中に身を置く地理学者たちは，講義のなかで学生たちに，高校までの地理と大学専門教育の地理学とは別ものであるということを口にすることが多いが，一方で，学問の行方さえも地理教育とそれに関わる制度に規制されてきたのは皮肉である。

結局のところ，統治に必要な情報を収集するために編まれた官撰地誌や植民地経営に資する目的で編まれた地誌以降，地誌は，地理学の外側からイデオロギー的な編纂の理念を付与されることもなくなったが，他方，社会との接点も失ったのである。

しかし，それでもなお個々の研究者のレベルでは，ある地域をいかに描くかを積極的に主張する人を見いだすことができる[6]。こうした地誌は，町誌や村誌のなかに現れる。だが，これらは記述者としての個々の地理学者の思想なり感性を表現した作品であって，学問というよりも芸術とよぶべきものである。

著者と同じ地域を別の視角から描いて，地誌のあり方をめぐって議論が澎湃として起こるということなど，論理的にはありえても，現実にはないと言ってよい。そもそも，特定の町や村など，小地域について他人が描いた地域を描き直すことに積極的な意義を見いだす地理学者がいるだろうか。

さらに，「何をいかに描くか」が，書き手の感性や地域をつらぬく精神の探究に求められるのであれば，これはもはや文芸作品であって，事実関係の当否を除いて，他人が口をはさむ余地はない。ありようをめぐる議論も成立せず，批評が感性のレヴェルでしか成り立たないのであれば，その作品は学問のジャンルで争われるものではなく，地誌「学」を名乗ることを放棄せねばならない。

こうして，地誌は大学の講義の場を離れたところでは，ある地域の事象を網羅した百科全書か，書き手の創造性に委ねられた文芸作品として存在することになった。だが，地誌を文芸ととらえるならば，読み手を広く一般の読者を求めて評価を求めるべきであろう。文学には，孤高の作家というものが存在しうるとは思うが，地理学者による地誌の現状というのは，ほとんどが孤高の作家の状態であって，あまたの書き手のなかに，読者に媚を売らない稟とした精神の持ち主が僅かながら存在するという状況ではない。

町村誌のように，記録として残す目的で書かれているものが網羅的であることはやむをえまい。しかし，内容が膨大なものになるにしたがって，当然のことながら，書き手の思想や感性は背景にしりぞいてしまう。その点で，地理学以外のジャンルに属する人が，ある特定の事象から地域を描きだす仕事には，たとえそれが地域のある断面を描いたにすぎないにせよ，地理学者の地誌にくらべれば，はるかに書き手の思想なり感性なりを明瞭に読み取れることが多い。

こういう仕事は，たとえそれが地域の特定の面だけを伝えていようとも，ある地域に関わりながら研究をしている人びとに知的刺激を与える。地理学者の地誌には，この知的刺激の源泉が決定的に欠けている。それは単に網羅的であることに起因するのではあるまい。感性や地域精神の探究と言いつつ，地域を統合的に描こうとすればするほど，透徹する思想が欠落していくのである。

地理学者は，もはや地域のありうべき統一性や総体としての地域を記述するという幻想から解放されてもよいのではないだろうか。地域を構成する要素だけを抽出するのでは，他の諸学との区別がなくなってしまう，地理学のアイデンティティが喪失する，それは地理学ではない――これまで何度となく繰り返されてきた地理学と地域との密接不可分な関係こそ，地理学者の抱いてきた幻想の本質である。

地理学を除く，他の人文，社会科学の分野に属し，なおかつ特定地域との関わりにおいて仕事をしている人には自明のことだが，記述することを本分とするかぎり，すべてを記述することはできない。翻って「特定のあることがら」を述べようとするのなら，そこには「あることがら」に則して地域を俯瞰する透徹した思想が必要である。

地理学者が地理学に固有の地域概念を純化させようとしているあいだに，地域は他の領域のランガージュによって，いくらも語られていた。それに気づかなかったのか，それとも気づいていながら，他の領域がめざしたアクチュアルな地域研究との関係を故意に無視しようとつとめたのか。地理学者が見ようとしていた地表とは，現実の世界——人間のあらゆる欲望がうずまく大地——ではなかった。

第二次大戦を経験した欧米や日本の地理学者たちが，地理学が地政学にすり替えられることを警戒したのは当然と言えよう。だが，彼らは政治的イデオロギーの学問への介入を回避する際に，地理学は政治や統治の具になってはならない，地理学は中立的な科学なのだから，という論理をもって対抗しようと図った。だが，それゆえに「地理学者の地域」は，一層，アクチュアリティから逃避した調和的地域像のなかに矮小化されることになったのである。

II　科学主義の不幸

1950年代に始まる計量主義は，一部の地理学者が欣喜雀躍するほどに革命的ではなかった[7]。何らかの法則が地表面の人文的現象にも作用しているはずだという意味ならば，環境決定論でさえひとつの法則である。クリスタラーの中心地の理論であれ，チューネンの農業立地論であれ，仮説的な理論を組み立ててから現実に適用してみるという試みなら，いくらもなされてきた。モデルそのものが独り歩きをした国家有機体説も仮説的なモデルのひとつと言える。もともと，自然科学的な出自をもっている以上，人文地理学のなかにも，法則や仮説やモデルを構築しようとする，あるいはそれらを具体的な地域にあてはめて検証しようとする動機は内在していた。そういう営為が地理学の目的だという意味ならば，何も革命を叫ぶまでもなく，とうの昔から地理学は科学であった。

革命の支持者たちにとっては，もともと批判の対象も，自分たちが何にならなければならないかという目標も定まっていた。これでは，地理学者のポリティクスとしての革命にはなっても，学問上の革命にはなりえない。近代に隆盛をみた進歩主義をだいぶ遅れてから表明したにすぎなかったのである。革命の言説を輸入した日本の地理学者たちのもの言いにいたっては，伝統的な地誌を墨守していたアンシャンレジームの地理学者やマルクス主義を標榜しつつも例外主義から抜け出せない経済地理学者を論難しようという意図が透けて見えるくらいに，感情的で稚拙な革命礼賛が後を絶たなかった[8]。

この革命宣言は，自然科学に潜在的コンプレックスを抱いていた多くの地理学者の賛美を集めた。同時に，訓詁学的なマルクス主義者の経済地理学にうんざりしていた自然科学志向の地理学者をも引きつけた。

おりしもトマス・クーンが「科学革命」のアイデアを世に問うた時期にかさなり，計量革命こそは地理学においての科学革命だと思いこむ地理学者は，日本でも後を絶たなかった。個性記述か法則定立かという二項対立的区分は，19世紀から知られていた学問の分類であって，「これからは法則定立で行く」と宣言すれば科学革命になるのではない。それに，クーン自身はパラダイム・チェンジという概念を持ち出すことで論理実証主義を批判したにもかかわらず，多くの地理学者には，その論理実証主義で「革命」を擁護するという程度の理解しかなかったのである。

日本ではアカデミズムのなかの地理学者は，しばしば理学部をはじめとする自然科学系の組織に所属している。数学や物理学などの自然科学者に周囲を包囲されている彼らが，近代科学たりうる地理学になろうというスローガンに飛びついたのは理解できるが，そこにはコンプレックスから脱出する道具立てとしての進歩主義が露骨に表明されていた。

地形学や気候学にせよ，あるいは環境科学や地球科学とよばれる分野の専門家たちが地誌を講じるとき，それは古くから地人相関論として知られてきたものの延長線上にあることが多い。たとえ，その研究者がどれほど自然科学としての地理学において先端的な知識をもっていたとしても，

自分自身の専門というものに忠実であろうとすれば，地表面に刻み込まれた人間の営為と自然環境との関わりを論じる以外に，ある地域を記述することはできない。

このことは，必ずしも自然地理学者が人文諸現象に疎いことを意味していない。このような地誌が無意味だと言おうというのでもない。地人相関論それ自体は，今日もなお完全に意味を失ったわけではない。だが，同じ研究者がある場面では自然科学者であり，ある場面では自然科学の方法とは論理を異にする学問の使い手でありうることは，論理として可能かもしれないが，現実的なことではない。私は自然科学者の学問が狭隘であると述べているのではない。近代科学を志向する地理学の学問としてのありようが，この使い分けをほとんど不可能にしているのである。

自然系の地理学者が地誌を論じるときに，地表に現れた人文，社会の諸現象を自然との接点で解釈したり記述しようとする。一方，人文，社会現象の解釈には，自然科学とは別個の論理が必要であることを人文系の地理学は説得的に示してこなかった。「例外主義」批判が登場した後は，ことさら別個の論理を必要とはしないという言説すら，計量主義の人びとから聞かれるようになった。それを批判したのは，論理実証主義的な方法への懐疑から生まれた人文主義的な地理学を支持する人たちだけであった。つまり，多くの地理学者が，人文系の地理学とて近代科学であることをほとんど疑っていなかったゆえに，自然地理学の人びとが地誌を講じることを越権行為だと批判する根拠を持たなかったのである。

結果として地誌が著しく地人相関論に傾斜したのは不幸であった。彼らの記述する地誌は，人文，社会の事象に自然科学とは別の論理がはたらいていることを知りつつも，自然と人間が直接関わる事象だけを抽出して展開する。あるいは無理をして，人文，社会の現象を自然条件に整合的に説明しようとするために，往々にして，風土という極度に抽象的な概念を持ち出すことになる。

風土という言葉が指し示すものは，論理的な思考を中止したところに創出される。かつての地理学者が，地域を複雑な要素から構成される統一体だと称したのと似ていて，何らかの定義をあたえたようでいて，何も語っていないに等しい。地理学者があやつる「風土」は，実在のものであるかに見えて，しかしながら存在を論証しえない。しかもこの言葉からは，一見するとオプティミスティックな中立性をもっているように見える。

だが，風土を論じる地理学者のほとんどは，風土という概念が，イデオロギーに極めて汚染されやすい危険性をもっていることには無頓着である。ひとつだけ例をあげておきたい。和辻哲郎や鈴木秀夫の風土論には，イスラムを沙漠と結び付ける論理が展開されていたが，それは西欧が連綿と築き上げてきたオリエントに対する知の構図——オリエンタリズム——の言説にみごとに符合している[9]。

確かに鈴木の指摘を待つまでもなく，イスラムの伝播した地域と沙漠とは分布のうえでかなり一致している。しかし，そこからはイスラムが沙漠的であるという論理を導き出すことはできない。イスラムに関する膨大な言説のなかから，沙漠的であるとの解釈に都合のよい論理だけを選びだそうとする思考の行為自体が，すでに西欧キリスト教世界が千年をかけて練り上げた知の力としてのオリエンタリズムに特有の手法なのである。

そもそもイスラムが沙漠的かどうかという命題には何らの意味もない。しかし，イスラム＝沙漠的なるもの＝厳しい自然＝生存をめぐる厳しい競争＝争いを日常とする人間関係という思考経路が，縦横無尽にイスラムを中東の紛争と短絡させたり，「目には目を」というイスラムとは無関係な標語に結び付けられたりしてきたのである。オリエンタリズムとは，このような思考回路を育んできた西欧キリスト教世界に固有の思考様式である。この種の思考様式にしたがうことからは，オクシデントが暗黙のうちにオリエントに求めているオリエント像しか導出されないことを風土論の著者たちは見落としている。

しかし地理学界では，せいぜい環境決定論との関わりで論じる者がいただけで，彼らのイスラムやオリエントに対する視角が問われることはな

かった。盲目的に中立的であろうとする地理学者は，風土という概念にイデオロギーによる歪みが入り込む余地があるとは思っていなかったのである[10]。

一方，人文，社会科学系の地理学者が地誌を講じると，それはどのような性格をもつのだろう。そこでは，自然地理学の専門家が講じる以上に目的と方法の混乱が現れる。いくつかのパターンに整理すれば，第一に地形や気候などの自然環境からはじめて，集落の形態，都市の形態，産業のありようなどを網羅的に羅列するタイプ，第二には，自然科学的システム論の味つけをして，地理行列などを使いながら，地域の特性を描こうとするタイプ，そして第三には自分の研究フィールドの事例だけを事細かに，まるでフィールド・ノートを棒読みしているのではないかと思わせるタイプがある。

その各々が学生に知的刺激を与えず，研究としても限られた意味しか持ちえないかは，すでに別のところで書いたことがあるのでここでは繰り返さない[11]。第一のタイプは旅行ガイドか町村誌の類でも読めばよいのであって，講義に値するものではない。第二のタイプは，計量地理学の成果を法則定立だけに限定せず具体的地域に応用してみようというもので，ほとんどのばあい，経済学と同様に条件設定が一定かつ厳密でないと意味を持たない。実際にそんなに厳密な条件を設定できることは少ないから，モデルを当てはめてみたら，この程度には適合したという陳腐な結論が導かれる。第三のタイプは，「私の村では」型と言うべきもので，微細な事象には詳しいが，その人がフィールドにしなかった地域の話や，より大きな地域スケールの話になると途端に語るべき内容が失われる。

これらの型は，それぞれ地理学がたどってきた道を映し出している。第一のタイプは言うまでもなく最も古典的な地誌であり，第二は計量革命をへた後，法則定立だけを志向するのは地理学の本質からの逸脱だとして，伝統に回帰した人びとの立場を体現している。そして第三のタイプは，地理学の近代科学志向からは距離をおき，ひたすら文芸としての地誌に徹する立場の人びとである。彼らのばあい，記述する地域のスケールを拡大できないことに決定的な限界がある。ミニアチュールの作家として秀逸な作品を残すことがあっても，グローバルなスケールでの地域誌を描くことは不可能に近い。

Ⅲ　制度化の不幸

ところで，地理学の研究者ならば誰しも知っていることで，地理学の外にいる研究者が滅多に知ることのない奇妙な事実がある。地理学の講座が，ある大学では文学部ないし人文，社会科学系の学部に所属し，またある大学では理学部ないし理学系の学部に所属しているという事実である。これはなにも日本だけの現象ではない。

文学部に自然科学系の地理学者が所属している場合，そのことがある程度まで，研究者の地誌に対する視角に影響を及ぼしたとしても，それは決定的なものにはならない。なぜならば，自然科学の方法や目的に対する信頼は普遍的な価値をもっていて，インスティテューションの内部におけるポリティクスによって右顧左眄する性格のものではないからである。同時に，自然科学者のサークルである地形学者や気候学者による学会組織は，自然科学の論理が貫徹する社会である。彼らが文学部や教育学部に所属していても，研究者としての評価を下すのはこうしたサークルの方であって，文学部の教授会ではない。そのことが，方法や目的のゆらぎを抑止する効果をもっている。

これに対して，人文，社会科学系の地理学者の場合，自然地理学者に比べ，大学内で所属する組織によって学問の目的や方法が強い影響を被っている。理学部に所属する地理学の組織は，まず，自然科学者という同質的な集団に包囲されることになる。これは文学部のなかに地理学科がある場合とは決定的に異なった意味をもつ。地理学を別にすれば，理学部のなかに人文，社会科学的な組織が組み込まれていることはほとんどない。

理学部ないし理学系の大学院研究科に所属する

地理学の組織の教育や研究は，自然科学への接近をはかってきた。制度の面から見れば，それは多分に接近を余儀なくされたと言うことができるだろう。それは，理学部という自然科学者の集団のなかで，異質性をできるだけ表に出さないようにするという自己防衛の結果を意味している。自然科学者が，本質的に異質な集団を排除する傾向をもつと言うのではないが，理学博士の学位認定などは研究科全体で審議するのが一般的であり，そのような場で，すぐれて人文あるいは社会科学的な地理学の論文に対して理学博士号を授与することに抵抗がないとは言い難い。

このような制度的な制約のもとでは，若い研究者の研究に何が求められるだろうか。より科学的アプローチによるシステマティックな内容であること，法則の定立にはいたらないまでも，モデル化やモデル検証の作業をともなった研究であることが望ましいものとして評価されることになった。

同時に，その研究が地理学的であるか否かも，俎上に乗せられている。そういう踏み絵的な審査が，あらゆる大学でおこなわれてきたと断定はしないが，私の知るかぎり，それほど例外的なことでもないようである。東京大学の大学院では，1980年代の初頭において「この研究は地理学であるか否か」という審問が大学院の演習で繰り返されていたことを私自身も記憶している。

なぜ地理学者の養成機関では，このように「地理学であるか否か」に大きな関心を寄せてきたのだろうか。地理学という学問は，すでに固有の対象を失っている。にもかかわらず，「地域」や「空間」を固有の研究対象だとするインプリシットな規定から自らを解放しようとしなかった。そして「地域」や「空間」を研究する隣接諸学の中心に地理学が位置づけられているという共同幻想を絆に学問のテリトリーを守ろうとする傾向は今もって存在する。それゆえに，若い研究者は，「地理学」の範疇だと指導する教授たちが考えてきたものから逸脱しないように求められることになった。

地理学における制度の問題を考えるときに，大学を除く地理教育との関係を忘れることはできない。地誌あるいは地誌学が，新しい地理学の動向からは取り残されたにもかかわらず講義として残存したことも，教員免許状を与えるための制度上の規範によるところが大きい。地理学専攻のコースの多くが教員養成系の大学や学部に存在していること，組織を持たぬまでも教職科目を担当する人員として地理学にポストが配分されていることも，アカデミズムとしての地理学が教育に支えられていることを示している。

にもかかわらず，地理学と地理教育とは大きく隔たったままであった。もちろんアカデミズムと地理教育で，各々が扱う内容や目的が，完全に整合的でなければならない理由はない。だが，アカデミズムに身を置いていると自覚している地理学者と地理教育に携わっていると自覚している教師のあいだで，隔たりを埋めるべきか，隔たりを容認すべきかを議論することが地理学にとって重要な課題だと認識されることもなかった。

議論を重ねたうえで，地理学と地理教育は別個の存在だと言うのならそれでもよい。現実には，多くの大学教師が高校や中学の地理の教科書の執筆者として名を連ね，印税を受け取りながら，学者としての自己と教科書執筆者としての自己は別人格の人間であるかのように振る舞っている。長いこと社会教育の一翼を担い，国際理解教育の基礎を担うものと位置づけられていた地理教育を，やはりアカデミズムは軽視してきたのである。

アカデミズムの地理教育への影響は，わずかに，経済地理学における下部構造主義が後ろ楯となって，地理教育の場でも生産の地理を重視する傾向を生み出したことに見いだすことができよう。だが，それすらも竹内が指摘しているように，日本の経済成長を支えるイデオロギーを教育の場に浸透させる一助となったにすぎない[12]。

逆にアカデミズムの中にある地理学者たちは，社会科教育としての地理教育からアカデミズムを照射する光があるのか，ないのか，それを検討することにも熱意がなかった。より明確に言えば，地理教育から自分たちが学ぶものはないと考えていた。

産物地誌的な地理の授業が今もって少なくない

ことは，大学で講義を担当している私も知っている。しかし，その産物地誌を講じる教師を養成してきたのは，地理学の講義を開講している大学である。高校までの地理教育と地理学とは別ものであると言うなら，せめて別物としての社会科の地理に何が必要であるかのを検討し，地理教師をめざす学生に教えるのが大学における地理教育の義務ではなかったのだろうか。

地理学のマーケットについて，地理学者はそれほど無関心ではない。だが，そこでは都市計画にもご利用いただけます，都市政策にもご利用いただけます，というような利権の絡んだ外界へのアピールがされることはあっても，最も重要なマーケットである地理教育の舞台で，どのようにお使いいただけるのかを提示することはなかった。新しい地理学の動向に乗り遅れまいとしていた人々は，とりわけ自分の取り組もうとしている学問的課題を地理教育に位置づけることに熱意がなかった。

社会科としての地理が解体されたとき，解体を主張した人びとは，地理学がすでに「裸の王様」と化していたことを見抜いていたはずである。世界史の必修化をすすめるイデオロギーとは別のレベルで，教育，そして広い意味での社会との連接を欠いたアカデミズムの地理学が，社会科の解体に抵抗しえないことを見抜いていたのではないか。私はそう推測している。

しかし，「現代世界の提起するアクチュアルな諸問題を現実に存在する地域にそくして理解すること」を目的とする教科は，あいかわらず地理以外にない。制度的な弱体化を別にすれば，この点での地理教育への社会的要請は強まりこそすれ，弱くなることはない。今までに地誌や地誌学がたどってきた不幸な道のりを棚上げにして考えてみれば，こういう地理教育の要請に対して貢献しうる大学の講義こそ，地誌や地誌学で開講されてよいはずである。マーケットの縮小を嘆く前に，アカデミズムの地理学は，「裸の王様」であったことを自覚し，アカデミズムの側から地理教育に対して，いかなる貢献ができるのかを検討しなおすべきである。

Ⅳ　地域研究と地誌のあいだ

地理学における地誌や地誌学の伝統とは別個に，ディスィプリンの確立をひとまずおいたうえで，地域研究とよばれる研究の領域が成立している。地理学は「地域」の研究や「地域概念」の研究を蓄積したかもしれない。しかし，そこには地理学者だけが共有してきた統一体としての地域像がたえず付きまとっていた。ありうべき対象としての地域を，構成する要素の関係から分析したうえで，それを統合し，地域像を描出しようとするのが，地理学における「地域」研究の本分であった。

だが，今日，東南アジア研究や中東研究のように呼ばれる研究領域は，このような地理学の地域研究とは，ほとんど接点をもっていない。最近では，地理学教室の紀要にも「地域研究」を標榜するものが散見されるが，――名乗ることは自由だが――そこに登場する研究の多くは，従来の地誌的伝統の看板を書き換えたにすぎない。

歴史学，政治学，経済学そして社会学などの領域から，個々のディスィプリンに依拠しつつ，特定地域の研究に踏み込んでくる場合とは，研究の対象としての地域に対する認識のありようが異なっている。地理学以外の領域では，「地域」をありうべきものとして，学問の自己目的にはしていない。諸要素が，分布したり，一定のグラフィックな構造をもつ場としての「地理学者の地域」は，*in vitro*（実験操作のために試験管のなかに実現された）の地域であり，他の学問領域が研究の対象にしようとする地域は，いわば *in vivo*（自然界，すなわち世界のなか）の地域なのである。

個性記述の学であった歴史学と法則定立的の学であった政治学，経済学そして社会学のような学問とは，今日，地域研究という共通のフィールドで仕事をすることが可能になっている。もちろん，ある地域の認識のありかたが，依拠する学問の種類によって同じであるとは限らないし，地域の構成要素の何を，いつの時代について，どう分析するかを地域研究の名のもとに規制することも

ない。

地理学の地域研究と他の領域の地域研究とのあいだに横たわるパーセプション・ギャップとはなにか。地理学者たちは，地域という風呂敷を広げ，地域を構成する諸要素としての品物を並べてみる。それから，伝統的地誌のようにそれらを感性で選び取ったり，計量主義の洗礼を受けた地理学のように行列に並べたりしてから，もう一度その風呂敷を結ぼうとする。風呂敷に品物を包んだ時点で研究は完了する。

しかし，他の領域の地域研究者は，風呂敷を結ぶことを研究の到達点だと認識していない。彼らが関心を寄せるのは，風呂敷のありようと，風呂敷の上にのっている品物であって，その品物がなぜこの地域の上にのっているのか，いつから乗っているのか，風呂敷の外にも同じ品物は存在しないのか，品物の時系列的な変化とはなにか，といったところにある。そして，品物の通時的，共時的分析を通じて，風呂敷のあり方を問いなおす作業に進んでくる。

この段階で，異種の地域研究の成果とのあいだに，風呂敷（＝地域）の大きさやら丈夫さやらについて議論を戦わせるのである。世界にはこういう風呂敷が何枚もあるし，もちろん大きさも多様であるし，大きさの異なる風呂敷が幾重にも重なっていることさえある。そして，通時的にみれば，外部の力によって風呂敷があてがわれたり取り替えられたり，特定の品物（＝要素）がはじき出されたり，外的な力で別の品物が持ち込まれたり，あるいは自発的に入ってきたりすることもある。さらに，今まで自分たちが見ていた風呂敷は，いかなる認識の上に風呂敷たりえたのか，本当は幻ではなかったのか，というように地域の認識論を問うことも地域研究の主要な目的にふくまれる。

一方，地理学者にとっての地域研究の目標は，いかに丁寧に美しく風呂敷を包むかにある。したがって，風呂敷のなかの品物がごそごそと動いたり，風呂敷を破って出てくるようでは困るのである。そのために，そういうやっかいな品物，すなわち政治や紛争や貧困や人々の叫びや泣き声や罵声は，はじめから風呂敷からつまみ出しておくのである。

地理学者がこだわるのは，極言するところ風呂敷の美学であって，しかも大方の地理学者は，国内外を問わず，きわめて小さな人形用の風呂敷ぐらいにしか興味を示さない。ヨーロッパや中東やアフリカといった大風呂敷になると，自分で包んでみることもできないので美学に反するのである。

言うまでもなく，風呂敷の美学は，地誌をはじめとする地理学の「地域」研究をさしているのだが，風呂敷そのものの形態や構造の解明をめざす立場もまた，地理学のうちには成り立ちうる。「地域」の学として，極限まで地域の空間構造にこだわるというのであれば，それはもはや空間や地域フェティシズムすら超越している[13]。こういう研究に対して，他の地域研究の領域との異同を論じることの意味はないし，地理学固有の孤高の「地域」研究と言うにふさわしい。

「最悪の役立たずにして穀つぶし[14]」は，地域研究をやっても地理学にはならないといいながら地域研究の仕事をし，地理学と他の領域の地域研究の接点を模索する知的営為を封殺しようとする輩である。地理学者のサークルでは，地理学をしているのだと胸を張り，地域研究のサークルでは，地域研究の業績を発表しておきながら，両者は別のものだと嘯くようなジキルとハイドが地理学を孤立させているのである。

これまでに展開した議論をもう少し具体的な地域にそくして検討してみよう。「中東」という地域呼称がある。*de facto* としての現在の国家の分布にしたがって言えば，東はおよそアフガニスタンの周辺から，西はモロッコ，モーリタニアあたり，さらにアフリカではスーダンまでを含めるのが普通である。

これに対して，ほぼ同じような地域を示す呼称として，西アジアや北アフリカがある。こちらは，アジア大陸の西部，アフリカ大陸の北部に位置することを意味している。しかし，どちらの呼称を用いるかは，それほど場当たり的なことではない。

中東という言葉が英語の Middle East，あるいはフランス語の Moyen-Orient の訳語であることは言うまでもない。1902 年にアメリカ合衆国の海軍史家，アルフレッド・マハンが，ペルシャ湾を中心とする地域を中東と呼ぶことを提唱したことに始まるこの地域呼称は，明らかにヨーロッパからその地域をみての呼称である。当時，まだ一部がオスマン帝国領であった近東（Near East）——すなわちバルカン半島——と極東（Far East）の間にあり，かつインドを除く地域が，ヨーロッパからみて中東であった。時代背景から考えて，中東という呼称が大英帝国やフランスの領土的野心を反映した政治的な地域編成概念として創り出されたと考えるのは妥当である。

この地域を呼ぶにあたって，こういう帝国主義の色に染まった地域概念を使うべきではないという主張がある。だが，中東を構成する大きな言語・文化集団であるアラブ，ペルシャ，トルコは，いずれも自分たちの言語でこの地域を中東と呼んでいる。アラビア語の al-sharq al-awsaṭ，トルコ話の Orta Doğu，ペルシャ語の Khāvar-e Miyāne，いずれも Middle East の訳語である。

さらに，これらを単に直訳の自称だと割り切ってしまうこともできない。東方問題の展開にともなってオスマン帝国領は分割され，英仏をはじめとする列強諸国は，中東の諸地域への権益を主張した。パレスチナ問題，レバノンの宗派紛争そしてクルド問題など，今日もなお続くさまざまな紛争は，まさしくヨーロッパによる分割統治の遺産として継承されたのである。

このような歴史をくぐり抜けてきた中東の人々は，植民地経営を象徴するような「地域」呼称を何の疑問も抱かずに使えるだろうか。パレスチナ人でさえ，自らの居住する地域を「中東」と呼んでいるのは，現在の彼らの存在すべてが，ヨーロッパが「中東」と呼んだことに規定されていることを自覚していればこそであろう。「中東」と呼ばれた歴史なくして，「中東」地域の直面する諸問題や今日の諸国家体制もない。このことを避けて通れないからこそ，私は自分の地域研究を「中東」研究だと考えており，研究の対象となる地域を「中東」だと認識している。もちろん，将来，この地に住む人々自身が「中東」の呼称を排除しようとする時が来たら，そのときには，なぜ「中東」が忌避され，他の地域呼称に代わったのかを検討することで，新しい地域研究の地平が開拓されるだろう。

一方，日本の地理学や地理教育では，この地域は西アジアと呼ばれる。エジプトとの言語・文化上のつながりを意識する場合には，西アジア・北アフリカという。だがこの呼称からは，中東が背負っている歴史的過去は抜け落ちているし，西アジアと北アフリカの双方に関わるイスラムやアラブ民族主義の問題を読み取ることはできない。

地理学そして地理教育には中立主義が蔓延している。しかし，地理学は科学なのだから政治的な問題は地理学になじまないという態度からは，地域のアクチュアリティに学問的に関わろうとする姿勢を読み取れない。科学であるべきだという言説も，所詮は科学至上主義というひとつのイデオロギーの立場を表明しているにすぎないのである。

中東という地域それ自体からしてそうだが，現代の中東では，国家であれ都市であれ農村であれ，あるいは沙漠であれ，およそ地域に関わる事象を扱おうとするとき，政治や政治に絡んだかたちでの宗教，そして民族の問題を抜いて論じることはできないと言ってよい。たとえば日本で，現代の都市構造を考えるときに，宗教や民族がインパクトをもつケースはきわめて限られているだろう。しかし，中東で，権力と民族や宗教の関係を見ずに都市の構造を検討するとしたら，およそ内容に乏しい成果しか得られない。

中東と呼ぶか，西アジアと呼ぶかという例だけをここでは問題にしたが，中東に関する限り，地域の呼称のなかにも，その地域と関わる姿勢が投影されてしまうのである。もちろん，東南アジアや南アジアなど，他の地域呼称でも，問題の位相が同じだと強弁するつもりはない。個々の地域には，その地域の歴史的コンテクスト，国際関係，民族そして宗教のコンテクストなど，さまざまな地域にそくしたコンテクストがある。これらをド

グマティックな規範にしてはならないけれども，それを無視した機能的な分析には普遍性などありえないことを肝に銘じなければならない。

V　アクチュアリティへの射程

地理学は，地球のアクチュアリティを見据える時に来ている。現在の地球は，環境の問題，紛争の問題，人権の問題，貧困の問題をはじめ，地球の枠組を超越したグローバル・イシュー（global issues）に直面している。これらの問題は，問題それ自体としてはグローバルな性格をもちつつ，しかも現実の地域の問題として地球上に現れる。

その発生のメカニズムの解明と解決ないしは緩和の方途を模索することに，地理学は本格的に関わってみることが必要である。本格的にといったのは，「『空間』や『地域』の問題に帰着したところで風呂敷を結んで手仕舞いしない」の意である。手仕舞いしないと地理学のアイデンティティが失われるのではないかと恐れる時はすでに過ぎ去った。

社会学であれ，政治学であれ，経済学であれ，19世紀に学問の骨格と制度が整った社会科学のすべてが，また，地理学者が親しみを覚えていた自然科学でさえ，個々のディスィプリンのあいだのテリトリーは曖昧になり，互いに相手の間隙を縫うように仕事を進めはじめている。

同時にグローバル・イシューは，グローバルな規模での地域の問題として私たちの前に立ち現れるのであるから，地域のコンテクストにしたがって読み解く作業，すなわち地域研究が求められる。むろんここでも，*in vitro* から *in vivo* の地域研究への転換が求められる。これらの知的営為をへて，はじめて地理学は19世紀的な学問分類の呪縛から解放されることになろう。そして，未来を射程に入れた社会科学として再生されるのである。

本稿は，地理学において，グローバル・スケールでの地域研究を阻まれてきた要因を地誌と地誌学がたどってきた終焉への道程から検討してきた。最後に，桎梏となってきた地理学上のドグマとは何であったのかを指摘することで本稿を終えることにしたい。

その一つは，地理学を系統地理学と地誌とに二分してきた二項対立の思想である。本稿の前半で述べたように，法則定立に対して個性記述という意味づけを与えられてきたことによって，地誌は死滅することも許されず，瀕死のまま生存してきた。法則定立が地理学の方向として確立することもなかったことを考えれば，もはや，この二項対立は実質的な意味を失っている。その上，法則定立＝科学という図式的理解に対置させられた地誌は，科学主義からすれば無価値の烙印をおされ，封印されてしまった。このことが，地誌からオルターナティブとしての進路を模索する契機を奪い，アクチュアリティを基本的な視座とする地域研究へ進む契機を奪ってしまった。

そしてもうひとつのドグマは，科学主義的な進歩主義にある。進歩主義からの解放もまた，地理学をアクチュアリティをともなった地域の学に引き戻すために必要であろう。科学主義は，地理学者にモデルや仮説や法則という目に見えぬツールを与えたが，地理学者はこれを――たいしたものではなかったのに――神にしてしまった。これらのツールが，人文，社会的な現象にあっては，およそ相対的で便宜的な意味しかもちえぬことを地理学者は認識したくなかったのかもしれない。

進歩主義にたつかぎり，それがイデオロギーの次元ではマルクス主義であれ，科学主義であれ，知の累積によって，学問は進歩し，真理に向かって歩みを進めているのだという安心を得ることができる。だが，この安心こそ地理学を隘路に導く罠であった。科学を標榜した時点で，その科学がすぐれて19世紀的産物であったにもかかわらず，地理学者は研究の視角や方法が，人文科学，社会科学の方向に傾斜することを自己規制しはじめた。

その後，論理実証主義の地理学に対抗するのに現象学をもってしたり，現実の社会問題にアクセスするためにマルクス主義を持ち出したことは地理学にさまざまなドグマを創出した。社会地理学の分野では，夥しい欧米の文献を渉猟し，社会学

のフィールドに踏み込んで議論を展開する傾向がみられるようになった。賢い学問ブローカーが，ヨコのものをタテにして撒き散らしたおかげで，こんどは柔道がプロレスと格闘技を演じなければいけないと錯覚する人たちが現れた。こういう人たちは，相手の社会学がアクチュアリティの問題といかに切り結ぼうとしているかを見ようとはせずに，相変わらず地理学に何か有用な知見はないかと探し回っている。

だが，これらの営為は，結局のところ地理学におけるパラダイム・ロストの状況を創りだすにすぎないだろう。地理学をして，地球上の諸地域において生起する諸問題の解明——それが地域研究のひとつの有力な課題である——に向かわせるインセンティブを与えることはなかったし，あいかわらず地理学は，もはや崩れかかった城壁の補修に余念がない。

このふたつのドグマから解き放たれることによって，地理学が長年にわたって，その本質だと思い込んできた「地域」や「空間」の諸問題は，地理学者のジャーゴンとしての「地域」や「空間」から解放される。そして，現実の地域コンテクストから読み解く姿勢に転換することで，地理学の地域研究は，孤立と閉塞の状況から脱却することが可能となるのではないだろうか。

注　記

1）　木内信蔵（1967）：『地域概論』第3節　地誌，東京大学出版会，211–213ページ

2）　石田龍次郎（1966）：「皇国地誌の編纂——その経緯と思想——」，一橋大学研究年報・社会学研究8，『日本における近代地理学の成立』大明堂，1983に所収

3）　石田，前掲書第三章以下

4）　竹内啓一（1983）：「ひとつの地理学——石田龍次郎の場合——」，『一橋論叢』第89巻4号，124–133ページ

5）　水岡不二雄（1985）：「マルクス主義地理学」，坂本英夫，浜谷正人編著『最近の地理学』第6章，1，225ページ

6）　宮口侗廸（1989）：「小地域を対象とする地域誌的研究のあり方について」『地域学研究』第2号，駒澤大学応用地理研究所，12–13ページ

7）　内藤正典（1989）：「現代地理学の再検討—第三世界研究の視点から—（第一部）」『地域学研究』第2号，駒澤大学応用地理研究所

8）　たとえば坂本英夫（1985）序章，「戦後の地理学の動向」坂本英夫・浜谷正人編著『最近の地理学』2ページ

9）　和辻哲郎（1935）：『風土』岩波書店，鈴木秀夫（1976）：『超越者と風土』大明堂

10）　オリエンタリズムと地理学の関係については，エドワード・サイード（1978）板垣雄三・杉田英明監修，今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社，221ページの指摘を参照。

11）　内藤正典（1990）：「地理学における地域研究の方向」『地理』35–4

12）　竹内啓一（1978）：「古い『地理』の重みから発想の転換へ」初出は『高校通信』12–12，『とぼろうぐ』古今書院，1993年に所収，94–103ページ

13）　例えば水津一朗（1982）：『地域の構造』大明堂，IX章

14）　竹内啓一の用語を借用したが，何が最悪の役立たずであるかの理解は異なる。竹内啓一（1993）：「ご用心，反地理学主義」『とぼろうぐ』古今書院，28ページ

本稿は鴨澤　巖法政大学教授の退職に際して，法政大学地理学会の求めに応じて書いたものである。しかしながら，退職記念論文という趣旨に反して，本文には一か所も鴨澤教授の業績に言及していない。私は鴨澤教授のトルコに関する地域研究とトルコ人移民労働者に関する研究から多くの知見を得た。しかしそれ以上に，地理学者としての鴨澤教授の姿勢には新鮮な驚きを感じた。それは，実際に現地での調査に同行して，「地理学者」である鴨澤教授が，それまでに私が接した地理学者とは異なり，「地理学にこだわれ」という言説で研究を規制する嗜好を持たないことであった。

私の研究者としてのオリエンテーションは地理学ではなく科学史にある。大学院に進んで地理学に触れ，人文地理学教室の助手となって，地理学が地域研究と接点をもたぬことを知り，私は驚いた。その後，私的な研究会を通じて，なぜ地理学が他の学問領域で行われているような地域研究と接点を持ちえぬのかを鴨澤教授を含む何人かの人たちと議論する機会を得た。そして，私なりに地理学と地域研究の関係を模索する試みを続けてきた。本稿が，鴨澤教授との地誌論をめぐる議論のなかから誕生した試論であることを最後に付言させていただく。